

現地通信

東南スラウェシ州再訪

田中 耕司*

「十年ひと昔」というのは、ほんとうにそのとおりだった。12年ぶりにインドネシアの東南スラウェシを訪れたときの印象である。はじめてこの地を訪ねたのは1980年末のことで、そのときは、東海岸のクングリから西海岸のコラカまで半島部を横断するごく短い旅行であったが、今回は、国際協力事業団の短期専門家として派遣され、ボネ湾沿岸部を中心にこの州を広く訪ねることができた。

驚いたのは道路の整備が急速に進んでいたことである。以前はクングリからコラカまで自動車でも1日かかっていたのが、道路の舗装がほぼ完全におわって、わずか4時間で2つの町が結ばれていた。最初の訪問時はこの道路の拡幅改良工事がはじまったところで、途中の湿地帯やコラカへぬける峠を通過するときは運転手が泥んこ道で苦労していたので、まったく隔世の感があった。クングリ周辺ではサゴヤシの林が消えて水田が広がっていたし、沿道の各地には新しい集落がたくさんできていた。また、スラウェシ全体で近年急速に拡大しているカカオ栽培がここでもずいぶんひろがっていた。道路のすぐそばまで森林があったかつての景観はこんな変化のなかですっかり姿を変えてしまっていた。

1980年前後は、この道路沿いに政府の移住政策による大規模な入植地がいくつか開かれている時期でもあった。いまではジャワ、バリ、ロンボックなどからの移住者がすでにたくさん定住していて、灌漑計画による水路設置もおわって農業基盤整備が進んでいるようであった。ジャワからの移住者はその後も継続しているようで、小さなワルンや商店、食堂の多くはジャワからの移住者によってこの10年くらいのあいだにひらかれたという。

東海岸のクングリから西海岸のコラカに向かうに

つれて南スラウェシから移住してきたブギス人が多くなっていく。もともとコラカ自体がブギス人がたくさん住む町で、西海岸は昔から南スラウェシの影響が強かったところである。それがさらに内陸部まで浸透していた。移住の目的はチョウジやカカオ、コショウの栽培で、現在開墾中というような土地にもよく出会った。こうした商品作物は収穫されるとボネ湾をこえて南スラウェシ側へ出荷されていて、シワ、ワタンボネ、シンジャイなどを経てウジュンパンダンに集められるという。

西海岸のコラカの北にはトシバという村がある。そこは対岸の南スラウェシ州シンジャイ県出身者の村である。トンドン、シンジャイ、パラニツパの3地域の出身者からなるこの村は、その頭文字をとってトシバと呼ばれるようになった。すでに1950年代後半から大量の移住者が来て水田を開いており、対岸のシンジャイ県やボネ県とあまり変わらない景観をもつ地域となっている。この付近一帯には、沿岸部のマングローブ林をひらいて養魚池をつくるために南スラウェシからいまもブギス人の新しい移住者がたくさん来ている。サバヒイやエビの養殖のため、その生産物もまたボネ湾を渡って南スラウェシへ送られている。

ジャワや南スラウェシからの移住者の到来とともに、もともとこの地域にいたトラキ人も大きな変化を受けていた。主な生業がサゴヤシ栽培であった彼らは、最近の水田の造成やカカオ、チョウジ、コショウなどの栽培の拡大とともに、移住者と同じような稲や商品作物の栽培へと移りつつある。今回の旅で、林と呼べるほどの規模でサゴヤシが残っていたのは、コラカ東方の峠付近と北方のカロロア付近のわずか2か所くらいで、この10数年のあいだにサゴヤシがずいぶん少なくなったようである。

わたしの調査している南スラウェシ州ルウ県では、そこへいったん移住したジャワ人やブギス人が

* Koji Tanaka, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

東南スラウェシ州へ再移住したり、出稼ぎに出かけるという話をよく聞いていたが、その多くは、この旅行中に見たようなチョウジ園やカカオ園の開墾に従事したり、その労働者として雇われているのであろう。また、養魚池の適地を求めて東南スラウェシへ移住する人々は南スラウェシの先進地であるピンランやマロスからだけでなく、ボネやシンジャイなどからも来ている。10数年前にルウ県で起こっていたのと同じような開墾ラッシュが、東南スラウェシではまだ現在進行形で起こっていたのである。

この他に、海にかかわる人々の暮らしに接触できたのも今回の訪問のもうひとつの成果であった。クングリとコラカの往復に加えて半島部の南部や州東南部のムナ島やプトン島へも足をのぼすことができた。こうした南部地方への旅は、外部からの移住者の流入と開拓によって大きな社会・文化変容を体験している農業フロンティアというイメージとは別に、東インドネシア海域世界の1メンバーとしての東南スラウェシという地域イメージをつかむのにも役立った。

この地域がたいへん乾燥した景観をもっていたのも、そんなイメージを強く抱かせたのかもしれない。半島東南部になると乾燥したアランアランの草地が多くなる。とくにワトゥモカラ川を渡って南へ進むとアランアラン草地にトラキ語でオラヌと呼ばれるヤシが散在する景観が広がるようになる。また隆起石灰岩からなるムナ島に渡ると、チーク林や、石灰岩を積み上げた柵で囲まれた畑が広がる景観が現われる。イネはほとんど栽培されず、作物はトウモロコシとキャッサバなどの雑穀やイモ類が主体で東風と西風の両方の季節風のもとで栽培されるという。いずれも、この地域が小スンダ列島の島々とよく似た特徴をもつことを示している。

ムナ島の南端に近いラヒア村ではアワをいまでも栽培している。ラヒアの人たちは遠く離れたアンボン島と古くからつながりがあって、この村で栽培されたアワはお粥にして食べたり、菓子用あるいは儀礼用に使われるだけでなく、アンボンまで運んで売りさばかれるという。

東南スラウェシの南岸部には、古くからブギス人の漁師が住みついている。彼らの漁場は沿岸部だけでなく、フローレス海一帯にわたっていて、漁師の

話ではフローレス島の沖合いまで出かけるのはたいへん簡単なことだという。そういえば、かつてスンバワ島の北岸を歩いていたときに、海岸から約2キロほど離れた、珊瑚石灰岩を積み上げたほとんど人工島といってよいような狭い島に、ブギス人の漁師の家がひしめくように建っていたのを思いだした。すでに小スンダ列島へ移ってしまったブギス人漁師と東南スラウェシのブギス人の漁師はなんらかのつながりをもっているかもしれない。また、当然のことながら、南スラウェシのブギス人やマカッサル人の漁師とも関係があるだろう。こうした漁師の活動を通して見ると、フローレス海をはさんだ二つの地域が一つのまとまった世界として浮かびあがってくるにちがいない。

また、東南スラウェシの各地でバジャウ人の村を訪ねることができた。半島部では西海岸のコラカ北部のウォロにあるラブハンバジョや東海岸のクングリ東郊にあるランギバジョ、またムナ島ではラハ郊外のラガサヤ島北端のタンポなどである。この他にも、ムナ島西海岸や半島部とムナ島との間に散らばる島々にはたくさんのバジャウ人の村があるという。定着化政策が進んで、いまは全部が海岸の集落に定住しているが、生計をほとんど海からの産物に頼っているのはいまでも変わりはないという。彼らの活動域は昔とくらべて狭くなったが、村々の交流は遠く離れていてもまだけっこう続いているという。

クングリから中部スラウェシ州東部へ向かう東海岸沿いの海上交通もまだ盛んであった。クングリからは自動車が通れるような道は通じていないし、ウジュンパンダンから陸路でいくとなるとずいぶん日数がかかる。けれども、クングリから機関付きのボートに乗れば、ひと晩でそこへ着くことができるという。船頭からそんな話を聞きながら、陸上交通に慣れてしまったわたしたちの盲点をつかれたような思いをしたものである。

時間の制限もあって、海をめぐる人々の活動について詳しく話をきく余裕はなかったが、東南スラウェシの沿岸部の人たちの生活をもっと調べれば、これまでとはずいぶん違った地域イメージが描けそうな可能性を実感させてくれた。東南スラウェシ再訪の旅はそんな旅でもあった。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)